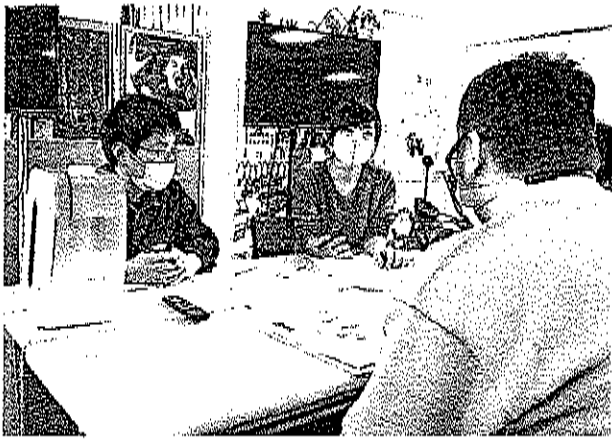


仕事・人とのつながり 取り戻す一歩を

コロナ禍のなかで仕事や住まいを失い、所持金も底をついて支援団体に送ったSMSメール。生活保護の利用で窮地を脱しても、それで終わり、というわけではない。再び人とのつながり、働く場に戻る。その一歩を踏み出すための模索が続いている。

支援団体が相談交流会

困窮者の孤立を防ぐために何ができるのか。昨年12月に初めて開催されたのが「しごと探し・しごとづくり相談交流会」だ。呼びかけたのは、反貧困ネットワーク事務局長の瀬戸大作さん。諸団体が連携して緊急支援に取り組む「新型コロナウイルス緊急アクション」の中心メンバーだ。「生活保護を申請してアルバイトに入室しても、その後が難しい。仕事が見つからず孤立を深めて連絡がとれなくなってしまう人もいます」。継続的な相談・交流の取り組みが求められる現場の実情を、瀬戸さんはそう説明する。



しごと探し・しごとづくり相談交流会で、ワーカーストップの事業について説明を聞く生活保護利用者の男性(右)。子育て支援の仕事について「視野になかったが、詳しく聞いてみたい」と話していた。3月、東京都豊島区

ワーカーストップが共催する。ワーカーストップは、働く人が地域に役立つ仕事を回分たててくれることを目指す協同組合だ。9月までに4回実施された。会場は東京都豊島区のワーカーストップの会議室。緊急支援などつながりができた当事者に個別に声をかけた。外国人を含め、毎回十数人が参加している。「一度は死んでもいいと思えた。脳梗塞の後遺症で手のしびれがあるが、できる仕事があれば、ゼロになった気分でもってみたい」。相談交流会では毎回、ワーカーストップの東京・千葉など首都圏にある事業所のメンバーが数多く参加した。学習クラブなどの子育て支援、高齢者・障害者支援、公民館の清掃など各地で取り組む仕事を紹介。地域ごとにテーブルを設置、個別に参加者の相談に応じた。職業が不自由で仕事が見つからないと

一度は住まいも失った男性 介護研修で見つけた「目標」

相談交流会への参加をきっかけに、新たな一歩を踏み出した人もいます。「目標に向かって勉強する場ができた。いろんな人との



コロナ禍のなかで仕事や住まいを失った40歳男性(左)。しごと探し・しごとづくり相談交流会を通じて介護職の研修を受ける。働き先を探し取った。10月、東京都新宿区(右)にSMSメールを届けた。

出会いが積み重なって、もとの生活に戻っていきけると思えている。希望は必ずある」。9月の相談交流会で、当事者の男性(左)はそうおぼろげに話した。7月から、ワーカーストップ「よけいごとステーション」(東京都新宿区)で実施される介護職初任者研修に通い始めた。同じく相談交流会から参加した外国人女性(右)も11月30日開業で、10月に修了証を受け取った。

男性は、契約社員としてコンビニエンスストアで働いていたが、コロナ禍のなかで契約更新されずに失業。住む場所も失った。今年1月に瀬戸さんからのSMSメールを受け、生活保護を利用した。だが、これまでの人間関係が断ち切られた事からは「孤独だっ

た」と振り返る。

8月の相談交流会を頼り出して「よけいごとステーション」担当の中村美奈さんから「興味ない？」と声をかけられたのが、研修を受けるきっかけとなった。足が不自由な祖父の入浴を介助した経験があったと語り、男性は「介護の研修を受けると自分がおじいちゃんにやっていただいたのと同じくらい助かったのか」という気持があっただけ、面白くなってきたと話す。

中村さんによると、男性は11月からワーカーストップの訪問介護事業所で働くことになる。介護職初任者研修の事務局の仕事も今後担当する予定だ。

男性は言った。「コンビニの仕事では毎日時間を潰されるばかりだった。いま、いったん立ち止まったから見えたものがある気がする」

(編集委員・清川史史)